



白鷹町 ●●●●●

きつねが教えてくれた 諏訪堰の水

げんざい ながいし はちまんやま しゆすい もがみがわ みず すわぜき
現在、長井市の八幡山の下から取水した最上川の水は、諏訪堰という水路により白鷹町東根地区を豊かな田んぼとしてうるおしております。

しかし、約400年前は荒地が多く、わずかな田んぼを、一生懸命耕しても出来る米の量は少なく、人々のくらしはたいへん苦しいものでした。村人たちは、もっと田んぼを増やし、米をたくさん取ることが出来ればくらしが楽になると願っておりましたが、そのためには、この広い荒地に水を引くことが必要なのでした。

そのような村人たちの強い願いをかなえるため、浅立村の沼澤伊勢と畔藤村の新野和泉という二人の郷土が立ちあがりました。ふたりは高台



昭和30年ころの堰止めの様子

に登り最上川から水を引くための方法を毎日考えておりました。ある日のこと、ふたりの目の前に二匹のきつねが現れ、こちらを見ているではありませんか。ふたりは不思議に思い、きつねたちに問いかけると、神様の

使いとして願いをかなえるため現れたというのです。和泉が「水路を通す場所を教えてくださいませんか」と話しかけると二匹のきつねは、三度鳴いた後に静かに歩き出したのでした。ふたりはきつねの後を追いかけて、下流まで来るときつねたちは鳴き声とともに消えてしまいました。それからのふたりは、村人たちを救えるという、大きな自信を持って本格的

に調査を始めました。

昔は、代官のお許しが無ければ、工事をする事が出来ない時代であり、ふたりは1603年(慶長8年)お許しをもらうため長井の代官にお願いに出かけ「多くのお金と人を使って工事をするのだから、失敗したときには罰としてふたりともはりつけする。」というきびしい言葉がありましたが、ふたりの決意は変わらず、2年をかけてようやく完成したのでした。

しかし、水を流すと土の中にしみこみ、途中までしか水が流れなかったのです。これでは、約束のとおりふたりは、はりつけになってしまいます。伊勢と和泉はいろいろなことを試してみましたが、どれ一つとして良い案が浮かばず途方に泣いておりました。



今の諏訪堰頭首工

そこに、一人のお坊さんが現れ事情を話したところ、古いむしろ(わらをひもで編みこんだ敷物)を水路の底にしくことを教えてくれました。早速ふたりは試してみると、むしろが泥を吸い、がっちり固まり、水がしみこむのを防ぐことが出来たのでした。

このふたりの活躍により諏訪堰がようやく完成し、荒地だった土地が田んぼとして生まれ変わり、米がたくさん取れるようになりました。それから村人たちは、諏訪堰を大切に守り続けてきたのでした。

【参考文献 「スワゼキ」の由来…諏訪堰土地改良区】